

現職教員の大学院生が現場に

上越教育大、学校を支援

大学院生として最新の指導方法を学んでいる小中学校や高校の先生たちが学校現場を支援する。こんな取り組みが上越教育大(新潟県上越市)で進められている。人手が足りない現場と、現場を離れることを不安に思う院生を結び試み。同大に来春設置予定の教職大学院では、「学校支援プロジェクト」としてカリキュラムに組み込まれる予定だ。

(葉山梢)

教える

education@asahi.com

「看護師さんは患者さんが元気になって退院すると、とてもうれしいそうです」

「板前さんに話を聞き、自分の好きな仕事はやりがいがあるの分かりました」
上越市立柿崎中学校の昨年度の1年生が取り組んだ総合学習「THEE仕事」ギャラリーを作ろう。生



商店街で働く人に話を聞く生徒たち＝新潟県上越市で(上越教育大提供)

徒たちは病院や商店街などで働く人たちに話を聞いた。働く姿を写真に撮ったりした内容を模造紙にまと

め、3月15日に発表した。職場見学は最近、多くの学校が職業教育の一環として採り入れているが、今回のポイントは写真撮影を入れたこと。事前に、地元新聞社である新潟日報社のカメラマンに講習を受け、作品は写真集にまとめた。このアイデアを出した大

学院生の竹内明仁さん(34)は「書くことが得意でない子もできる。作品が残ること、単なる見学にとどまらないものになったのではないか」と話す。

竹内さんは静岡市の小学校の先生。静岡県から派遣され、昨年から同大で学んでいる。「久しぶりに現場に入れて楽しかった。最初は戸惑うこともあった

が視野が広がった」という。

柿崎中の藤田由江先生も「総合学習でやりたいことはたくさんあるが、準備の時間がなかなかとれない。訪問先との交渉などを上越教育大チームにやってもらい、助かった」と歓迎する。

上越教育大では現在、教官と院生を組み合わせた11

のチームが地元の小・中学校を支援する事業に取り組む。藤田武志准教授(教育学)は「外部から人を入れることは面倒と思われるが、でも、現職教員なら話が進みやすく、現場も楽になる。大学にとっても地域貢献になるなど利点が多い」と話す。

藤田チームは今年度も柿崎中を支援するという。

飲酒・喫煙望む子どもも激減

文科省調査

公立小中高計762校を対象に実施された。「酒を飲みたいと思った

ことがあるか」の質問に、「ある」と答えた割合が最も高かったのは高3女子の

飲酒や喫煙をしたと思う子どもが減っていることが、文部科学省の調査でわかった。調査対象の小6、中3、高3の3学年すべて同じ傾向で、同省は「学校での取り組みがうまくいっている」とみている。

調査は昨年2月、全国の

The Asahi Shimbun
高校3年生の意識の変化

